

図案から創作物へ

— 1949年から1980年までの中国におけるミャオ族の 民族衣装に関する書籍と展覧会の変遷 —

佐藤 若菜*

本研究の目的は、新中国成立から1980年まで、少数民族の物質文化が中国国内でいかに扱われてきたのかを、ミャオ（苗）族の民族衣装に関する書籍と展覧会に着目して明らかにすることである。1949年から1957年までは、新しい民族政策のなかで、少数民族の民族衣装に対して、より深い理解が求められるようになった。他方で、民族的な異質性は漢族の規範から逸脱した不適切なものとしても捉えられていた。1958年以後は、社会主義的風潮が強まるなかで、民族的な特徴はそれほど重要視されなくなる。1980年代になると、民族衣装に対する不適切なイメージはなくなり、消費可能なものへと変化していった。こういった民族文化をめぐる大きなうねりのなかで、ミャオ族の民族衣装は書籍や展覧会でいかに扱われたのか、本論文では1949年から1980年までの変化に着目して検討する。

結論では、1949年から1957年までに見られる民族文化への理解の深まりと蔑視は、ミャオ族の民族衣装においては、衣装図案の収集と整理、そして図案集の出版というかたちで実践されていたことを指摘する。図案に焦点を当てるということは、衣装全体を示すことを避けるということでもあった。1958年以後、社会主義的風潮が強まると、美術作品展や「民間工芸美術」「民族民間美術」をテーマとした展覧会增加し、そこでは図案・紋様や民族文化を反映した創作物が展示されるようになった。これらの展示品は、1957年までの図案の収集と整理の成果を参照しながら生み出されたものである。今日では、民族衣装全体を展示したり、撮影しそれを書籍として編纂することは通例となっているが、中国国内における民族衣装に関する書籍や展覧会では、新中国成立以後、図案から創作物へと重点が変化し、双方が継続するなかで、民族衣装全体も掲載・展示されるようになったことを指摘する。

キーワード

民族衣装、展覧会、図案、ミャオ族、中国

目次

- | | |
|--|------------------|
| I はじめに | IV 図案から生み出された創作物 |
| II 1953年から1957年までの調査活動と出版物
——図案の収集と整理 | V 結論 |
| III 1958年以後の展覧会の増加——図案と創作物
から民族衣装へ | |

* 京都女子大学

I はじめに

本研究の目的は、新中国成立から1980年まで、少数民族の物質文化が中国国内でいかに扱われてきたのかを、ミャオ（苗）族の民族衣装に関する書籍と展覧会に着目して明らかにすることである。1950年から1964年まで、中国では民族分類のための大規模な民族調査が行われた。それに伴い1950年から1956年までは、民族の発掘と認知に加えて、民族の平等政策や文化政策の推進により民族的融和を実現した（毛里1998: 61-62, 91-102）。しかし、1957年の反右派闘争を契機に事態は一変した。1958年から1976年までは、毛沢東の指導下で、民族文化の独自性は否定され、文化の均質化と経済発展への貢献を通して、中国全体における統一化が求められた（Schein 2000: 86）。その後、毛沢東の死、文化大革命の終了を経て、1978年に民族政策が再開している（毛里1998: 117）。

中国における民族政策の紆余曲折に伴い、ミャオ族の民族衣装に関する書籍・展覧会の内容も変化した。シェインは、1958年を境に民族衣装に関する出版物の内容は一変し、そのことは『貴州少数民族蠟染圖案』

（図1）（貴州省文化局美術工作室研究組（編）1956）と『兄弟民族形象服飾資料』（図2）（貴州省第二軽工業局工芸美術研究室・貴陽市工芸美術研究所（編）1976）の違いから明確だと指摘する。1956年に出版された『貴州少数民族蠟染圖案』では、実際に着用されている少数民族の衣装の紋様が詳細に模写されており、キャプションには衣装が収集された県・郷レベルの地名が明記され、地域の特徴が強調されている。他方、1976年に出版された『兄弟民族形象服飾資料（苗族・布依族・侗族・回族）』では、主にミャオ族等の線画が掲載されるものの、民族衣装の詳細や地域の特徴はほとんど示されておらず、社会主義国家を発展させるという共通の目的が強調されている。1958年を境に少数民族文化に関する出版物は、表面的な少数民族文化の特徴と社会主義的要素を組み合わせたものを中心となり、こういった状況は1976年まで続いた（Schein 2000: 87）。この時期、民族性を備えた全ての民間芸術はすみやかに改造され、革命性を備えた新しいスタイルを採ることが求められていたのである（周2015: 246）。

毛沢東時代が終わり、1980年代に入ると、少数民

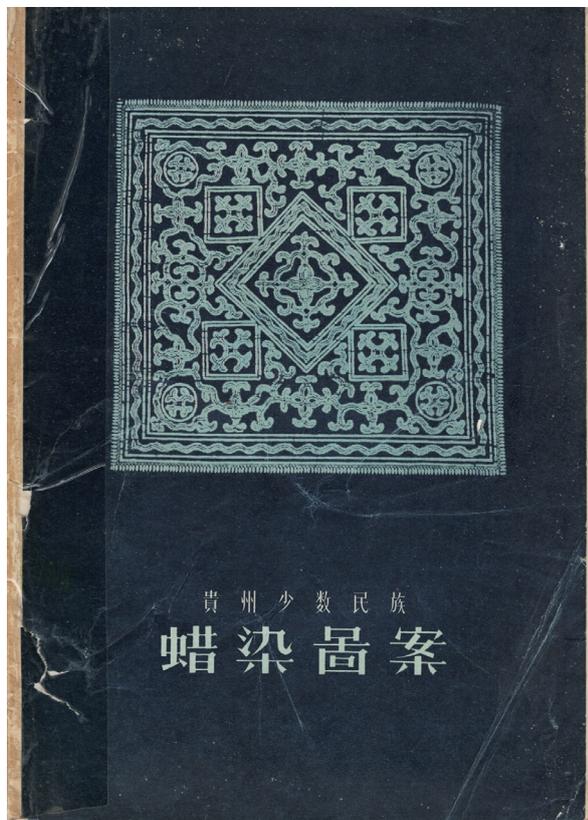


図1 『貴州少数民族蠟染圖案』
（貴州省文化局美術工作室研究組（編）1956）の表紙



図2 『兄弟民族形象服飾資料（苗族・布依族・侗族・回族）』
（貴州省第二軽工業局工芸美術研究室・貴陽市工芸美術研究所（編）1976）の表紙

族文化に関する出版・研究が爆発的に増え、商品化も進んでいった (Schein 2000: 88-89)。同時に、1980年代半ばからは、中国都市部における収集ブームを背景に、国内の研究者もまた文化保護の観点から民間文学や民間音楽を記録し、それを出版するようになった。そういった影響は一般の人々にも広がっていった¹ (Schein 2000: 204-207)。

少数民族文化は、1953年から1957年までの民族文化への理解を促した時代と、1958年から1976年までの民族文化を軽視した時代、そして1980年代以後の消費可能な民族文化として再び注目が集まった時代の、大きく3つに分けることができる。本論文では、主に前半の2つの時代においてミャオ族の民族衣装への関心がいかに変化したのかを書籍と展覧会に着目して明らかにする。

これにあたっては、中国においてミャオ族女性がいかに捉えられていたのかという点も踏まえる必要がある。明清時代におけるミャオ族女性は、漢族やその他の支配層から、中国文明におけるジェンダー規範から逸脱した、野蛮さを有する存在として蔑視されていた。彼女たちの縛られていない脚、露出度の高い衣服は、婚前交渉とも相まって性的なものとして捉えられた (Diamond 1995: 103, 1988: 13, 18-19)。また、ミャオ族の女性たちは蠱毒²を操ることから、恐れられてもいた (Diamond 1988)。かつての中国では、ミャオ族女性やその民族衣装を不適切なものとして捉える風潮があったのである。だが、1958年以降、衣装への見方は変化し始め、1980年以後は衣装の美しさに注目が集まるようになることで、民族的異質性は消費可能なものへと変化していった (Schein 2000: 60-61)。

以上のことをまとめると、1949年から1957年まで、少数民族の民族衣装は民族文化の一つとしてより深い理解を求められるようになった。一方で、衣装をはじめとした民族的異質性は不適切なものとして捉えられていた。1958年以後は、社会主義的風潮が強まる

とともに、民族的な特徴はそれほど注目されなくなる。1980年代になると、民族衣装に対する不適切なイメージはなくなり、消費可能なものへと変化していったのである。こういった民族文化をめぐる大きなうねりのなかで、ミャオ族の民族衣装はいかに扱われたのか、本論文では新中国成立から1980年までの書籍と展覧会に着目しながら明らかにする。

II 1953年から1957年までの調査活動と出版物——図案の収集と整理

シェインが1953年から1957年までの5年間を代表する書籍として挙げていた『貴州少数民族蠟染図案』(貴州省文化局美術工作室研究組(編)1956)のほかにも、この時期には類似の書籍が出版されている。『苗族刺繡図案』(中央民族学院民族文芸工作団・貴州省文化局美術工作室研究組(編)1956)と『貴州少数民族図案選集』(貴州省群衆芸術館(編)1956)である。いずれも刺繡や蠟染め、紋織り、剪纸、毛織物の図案を描写したものを掲載した図案集である。こういった図案集は、1958年以降も出版されている³(表1)。

『貴州少数民族蠟染図案』(貴州省文化局美術工作室研究組(編)1956)を編纂した貴州省文化局下の美術工作室(特に民間工芸美術組)は、1950年代に民間工芸美術の仕事に従事してきた機関である。その後、美術工作室は、貴州省群衆芸術館⁴と貴州省文学芸術界聯合会の美術組(現在の中国美術家協会貴州分会)へと分かれた(馬1987: 613)。1956年に貴州省群衆芸術館が編纂した『貴州少数民族図案選集』(貴州省群衆芸術館(編)1956)の序文には、貴州省文化局美術工作室が2年かけて民間芸術の収集と整理を行い、まとめたものと記されている(貴州省群衆芸術館(編)1956)。つまり、表1の図案集の多くは、貴州省文化局美術工作室による図案の収集と整理を基礎として展開してきたのである。以下で、詳細を確認していく。

1 あるミャオ族男性は、1986年にミャオ族の刺繡と銀装飾の紋様を記録し始め、1988年までには刺繡の袖や靴の装飾にある図案を70から80ほど記録していたという (Schein 2000: 204-207)。

2 邪術の一種とされている。詳しくはDiamond (1988) を参照。

3 西南中国では、貴州省以外でも同様の書籍が出版されている。例えば、『西南少数民族織繡図案』(譚1957)、『湖南少数民族図案集』(湖南省民族事務委員会(編)1957)、『蠟染』(汪(収集整理)1982)、『苗族侗族服飾図案』(汪(収集整理)1983)、『苗族裝飾芸術』(麻(編・絵)1987)、『中国民間美術叢書1 苗族裝飾芸術』(李・周(編)1989)である。

4 貴州省群衆芸術館は、貴州省文化局美術工作室と音楽工作組を基に組織された機関である(中国芸術館籌備処・北京華人経済技術研究所1997: 686)。1956年7月に貴州省群衆芸術館を設立し(中国美術家協会貴州分会籌委會(編)不明: 31)、1958年5月には貴州省群衆芸術館美術組に改組した。下部組織の一つには民間芸術組があった。1958年5月には貴陽市群衆芸術館が設立された(中国美術家協会貴州分会籌委會(編)不明: 32)。

表1 新中国成立以後から1980年代までに出版された貴州省ミャオ族の民族衣装の図案を掲載した文献

出版年	書籍タイトル	編纂者	出版社
1956	苗族刺繡図案	中央民族学院民族文芸工作団・貴州省文化局美術工作室研究組	人民美術出版社
1956	貴州少数民族蠟染図案	貴州省文化局美術工作室研究組	人民美術出版社
1956	貴州少数民族図案選集	貴州省群衆芸術館	貴州人民出版社
1959	貴州苗族民間剪紙	貴州省群衆芸術館	貴州人民出版社
1960	工芸美術叢書 丹寨苗族蠟染	貴州省群衆芸術館	上海人民美術出版社
1965	貴州少数民族服飾図案選	貴州省群衆芸術館	上海人民美術出版社
1980	貴州苗族蠟染図案	馬正栄	人民美術出版社
1981	貴州苗族蠟染図案	馬正栄	中国外文出版社・美乃美
1981	蠟花朵朵(図案集)	劉顕・包慶釗・呂国昌(絵)	貴州人民出版社
1986	貴州少数民族服飾図案芸術	黄守堡・劉宗河	貴州人民出版社・外文出版社

(筆者作成)

表2 1953年から1957年までに貴州省で行われた民族衣装に関する調査の概要

	日時	調査地域	派遣機関	調査・収集内容	調査成果
1	1953年9月	炉山県・台江県	貴州省美術工作室	ミャオ族の服飾図案	約50の紋様を収集、20を整理
2	1953年11月	炉山県・台江県	貴州省美術工作室	ミャオ族の服飾図案	約100の紋様を収集、22を整理
3	1953年11-12月	炉山県・黄平県・施秉県	貴陽師範学院芸術科	ミャオ族の刺繡と織物、蠟染め	約100の紋様を収集、35種の実物を収集
4	1954年3-4月	台江県	貴州省美術工作室	ミャオ族の刺繡図案	約50の紋様、約100の剪紙(刺繡の型紙)を収集
5	1954年5月	黄平県・鎮寧県・普定県・安順県	貴州省美術工作室	少数民族の蠟染め図案	約120の紋様を収集、62を整理
6	1955年2-9月	安順県・台江県・鎮寧県	貴州省美術工作室	少数民族工芸美術品	展示用の少数民族工芸美術品の収集
7	1955年11月	貴築県	貴州省美術工作室	ミャオ族の挑花図案	約100の紋様を収集、32を整理
8	1956年10-12月	貴築県・安順県・平壩県	貴州省群衆芸術館	ミャオ族・ブイ族の挑花	約60の紋様を収集、31を整理
9	1956年10-12月	貴築県	貴州民族学院芸術科(元貴陽師範学院芸術科)	ミャオ族の挑花図案	約80の紋様を収集、21を整理
10	1957年2-5月	黄平県・台江県・雷山県・炉山県・麻江県・丹寨県・三都県	貴州民族学院芸術科	少数民族の蠟染め・剪紙・刺繡・服飾	約100の実物・写真・文字記録を収集、約100の剪紙を収集、約20種の服飾を速写
11	1957年3-4月	丹寨県	貴州省群衆芸術館	ミャオ族の蠟染め	(実物・記録・写真・文字記録を含め)約200の紋様を収集、40を整理
12	1958年6月	独山県	貴州省群衆芸術館	漢族の剪紙	約200の剪紙を収集

(出典)『貴州美術工作十年概況』(中国美術家協会貴州分会籌委會(編)不明:84-87)をもとに筆者作成

新中国成立後の10年間、貴州省文化局美術工作室の活動については、『貴州美術工作十年概況』(中国美術家協会貴州分会籌委會(編)不明)に詳しく記されている。1950年3月に貴州美術工作者協会籌備委員

会、1953年には貴州省文化局美術工作室民間美術研究組⁵が設立され、「貴州の民族民間美術に関する収集と整理を開始した」(中国美術家協会貴州分会籌委會(編)不明:3,7)。この時期、多くの美術工作者(美術

⁵ 当該組織の長は黄守堡、副組長が馬正栄であった(中国美術家協会貴州分会籌委會(編)不明:30)。

関係の仕事に携わる人)は少数民族地区へ赴いて滞在し、民族文化の調査を重点的に行っていた⁶(表2)。当時の中国では、美術家が農村部や工場に赴き、働くことが求められたのである。具体的には以下のように記録されている。

…各級の党委の指導の下、毎年多くの美術工作者が地方や工場を訪問した。短期間滞在する者もいれば、長期間滞在し実際の仕事を担う者もいた。…民族美術に関しては、10年間、美術専門工作者11組のべ人数32人を組織し、我省の黄平、…台江、施秉、…雷山、…丹寨、…貴陽市郊外等の県市の兄弟民族地区に赴いて調査し、苗・布依・水・漢族等の民族の蠟染め・刺繍・挑花(クロスステッチ)・剪紙・編織等の図案紋様1,415点集め、229点を整理し、貴州民族図案紋様選集6冊(『貴州苗族刺繍図案集』、『貴州少数民族蠟染図案集』、『貴州少数民族挑花図案集』、『貴州苗族剪紙図案集』、『貴州少数民族挑花図案集』、『貴州丹寨苗族蠟染図案集』)を執筆・編纂し、北京と省内で出版し、国内外の高評価を得た。(中国美術家協会貴州分会籌委會(編)不明:3,7,9,23,84)

ここからもわかるように、「貴州の民族民間美術に関する収集と整理」とは、主には図案の収集と整理であった。より具体的には、調査地での図案の模写と衣装そのものの収集、そして出版に向けた図案の整理である(馬1987:614-620)。それらの調査の成果は1956年から1965年までの間に6冊の書籍としてまとめられたのである(中国美術家協会貴州分会籌委會(編)不明:85-87)。前章では、民族識別の一環として大規模な民族調査が行われたと述べた。その成果である『苗族社会歴史調査(一)』の「第五篇 台江県苗族的服飾」(貴州省編輯組(編)1986)には、貴州省東南部にある台江県のミャオ族の民族衣装に関する詳細な調査結

果が掲載されている。この調査時期は、「1957年4月末までの3ヶ月間」と記載されていることから、民族調査よりも早くに、貴州省文化局美術工作室による図案の収集は行われていたことがわかる。「第五篇 台江県苗族的服飾」には、性別・年齢・季節・場面・社会階層・経済階層ごとの衣装の種類や、衣装の形式・図案・紋様・色、衣装製作に関する調査結果を詳細に示している。また、県内における地域別の衣装の特徴として、服装の形式と刺繍の紋様・技法をもとに紹介している(貴州省編輯組(編)1986:313-328)。ここには、多くの図も掲載されているが、その全てが刺繍の図案である。全国的な民族調査にどれほど影響を与えているのかは不明であるが、新中国成立後、民族衣装に関して最も先駆的に調査を行っていたのは、貴州省文化局美術工作室だったのである。また、1950年代に始まった民族衣装の図案の収集と整理は、中国国内ではその後も一つの主要な研究方法として続いていく。

筆者は、当時の状況について馬正榮氏に聞き取り調査を行った⁸。彼は、1980年と1981年に『貴州苗族蠟染図案』を編纂している(表1)。浙江省生まれの馬氏は1952年24歳の時に中央美術学院華東分院工芸美術学部を卒業し、その後、中国美術家協会貴州分会⁹に配属された(中国美術館(編)1993:493)。彼は当時の仕事について、「1953年10月から貴州省で働き始め、収集の仕事を多く任された。一年のうちの半分は農村にいた。他機関の職員と一緒に農村へ行った」と話していた(佐藤2024)。「他機関」については、貴州省群衆芸術館を挙げていることから、表2に示した貴州省美術工作室による調査にも参加していたと思われる。

当時、なぜ民族衣装の図案に着目して調査を行ったのかと、筆者が馬氏へ問うと、民族衣装は生活用品として扱われており、汚いというイメージとも相まって、衣装そのものを収集することには抵抗があったと答えた(佐藤2024)。また、図案に関心を寄せるきっかけ

6 1953年9月から1958年6月までの間に、貴州省各地に12回赴いており、うち貴州省美術工作室の幹部が6回、貴州省群衆芸術館の幹部が3回、貴州民族学院芸術科(1953年の時点では貴陽師範学院芸術科)の工芸・美術教師が3回調査を行った(中国美術家協会貴州分会籌委會(編)不明:84-87)。

7 この本に限っては、筆者は原本を確認していない。また、実際に出版された書籍名(表1)と照らし合わせると、ここに掲載されている書籍名のなかには出版時と異なるものもあった。

8 2016年9月12日に、貴州省貴陽市にある馬氏の自宅にてインタビューを行った。

9 貴州美術家協会貴州分会とは、貴州省文学芸術界联合会による統率・指導の下、全省の美術家が自ら志願し集まった群衆性の専門団体である。1950年3月に貴州省美術工作者協会籌備会が発足し、1956年5月に中国美術家協会貴陽分会籌備会が設立され、1979年5月に貴州分会が設立された(中国美術館(編)1993:109)。馬氏が配属されたのは、貴州省美術工作者協会籌備会であったと考えられる。

として雷圭元氏からの助言があったという。

雷氏は、中国では現代工芸美術の教育と研究における先駆者とされている¹⁰。1906年に北京で生まれ、1927年に国立北平芸術専科学校図案部を卒業し、1929年にはフランス・パリに行き、絵画と染色、漆絵を学んだ。1931年に帰国し、国立杭州芸術専科学校にて教鞭をとり、日中戦争期には四川省の成都芸術専科学校で働いていた。戦争が終わると、1945年に国立杭州芸術専科学校に戻り、1949年から1952年まで、馬氏が在籍していた中央美術学院華東分院で勤務している。雷氏の著書『新図案学』は大学の教科書にもなっていた(中国美術館(編)1993: 275; 楊・林(編)1992: 258-259)。馬氏によれば、図案の収集にあたっては、中央美術学院華東分院時代の雷氏からの図案学に関する指導が大きかったという。

雷氏は、日中戦争時、成都芸術専科学校に在籍していた頃に、貴州省で少数民族の民族衣装に出会い、関心を持った(馬1987: 613)。そこから、馬氏に対してミャオ族の図案を調査することを勧めたのだという。馬氏が編纂した著書『貴州苗族蠟染図案』(馬(編)1981)には、雷氏が「貴州蠟染めの魅力」と題した序文を提供している。そこには、「私は貴州省の少数民族苗族の蠟染めの図案が大好きである。素朴でありながら気品に富む新鮮なデザイン。近くで見ても遠くから眺めてもなんともいえない魅力がある。…民間芸術としては際立った処理法といえよう。簡単な材料で、見るものを心豊かにしてくれる芸術的効果はまことに得難いものである。…馬正栄氏は同好の士だ。…このような民間芸術が今後も多く収集、整理されることを望むとともに、馬正栄氏が他の多くの芸術家と協力して、この少数民族の芸術の花をより香しく咲かせていられるよう願ってやまない」(雷1981: 3)と記している。ここからも、雷氏がミャオ族の蠟染めの図案に魅せられ、その収集と整理を馬氏に勧めたことが確認できるのである。

以上のように、新中国成立後、1953年から1957年までに貴州省文化局美術工作室や貴州省群衆芸術館といった機関が少数民族地区で先駆的に調査を行い、民族衣装の図案の模写と整理を行っていたことがわかっ

た。これらの調査成果は、図案集としてまとめられ、出版された。図案に関する調査・整理に特化していた理由として、当時の民族衣装は生活用品として扱われ、汚いというイメージもあったこと、そして図案学を研究していた雷圭元氏の影響が挙げられる。

III 1958年以後の展覧会の増加——図案と創作物から民族衣装へ

第I章で述べたように、1958年以後は社会主義的風潮が徐々に強まるとともに、民族的な特徴はそれほど重要視されなくなる。これに伴い、図案に関する調査も下火になっていった。だが、表1を見てもわかるように、1957年までの調査成果は、1965年までは図案集として編纂され、出版されている。それ以降は、1980年まで図案に関する書籍は出版されていない¹¹。

文化大革命の後期に図案集に代わって編纂されたのが、第I章でも紹介した『兄弟民族形象服飾資料(苗族・布依族・侗族・回族)』(貴州省第二軽工業局工芸美術研究室・貴陽市工芸美術研究所(編)1976)である。このほかにも、『少数民族服飾資料(内部参考)』(上海工芸美術研究室(編・絵)1973)など、少数民族の人々を描いた線画をまとめた内部資料がいくつか編纂された。文化大革命終了後にも、類似の書籍が出版されている。例えば、『苗族、布依族服飾資料』(芸術資料組(編)1978)や『貴州少数民族服飾資料(苗族部分)』(蔣(絵)1980)である。これら4冊の書籍のタイトルには「図案」ではなく、「服飾資料」という言葉が使われているのも特徴の一つである。

以上のことからわかるように、貴州省では1953年から1958年までの調査をもとに民族衣装の図案集が1956年から1965年までに編纂・出版されるが、1966年から1972年までの約6年間は民族衣装に関する書籍は編纂されていない。この時期になると、貴州省の民間工芸品は「封建主義・資本主義・修正主義に関わる禁制品」とみなされ、1977年まで収集と整理は一時的に停止したという(馬1987: 613)。馬氏へのインタビューでも、「文化大革命の時期は、民芸品は良くないものとされていた。仕事が終わると、隠れて蠟染

¹⁰ 中国美術学院 HP「名家名作、雷圭元」より一部抜粋した。https://www.caa.edu.cn/xy/mjmz/lgy/index.html#&panel1-1 (2025年1月12日閲覧)。

¹¹ 中国では社会歴史調査をはじめ、1950年代に行われた調査の成果が文化大革命後の1980年代に出版されるということがしばしばある。

表3 新中国成立から1980年代までに中国国内で開催された西南中国に居住する少数民族の民族衣装に関連した展覧会の概要

開催期間	展覧会名	開催場所
1956年1月1日-1月22日	西南地区少数民族图案展覽	中国美術家協会展覽館
1957年9月27日-10月13日	湖南省民間工芸美術展覧会	中国美術家協会展覽館
1958年2月	貴州省首屆美術作品展覧会	不明(貴州省)
1958年4月	貴州省民族民間服飾花紋展覧会	不明(貴州省)
1958年5月	貴州省民族民間工芸品展覧会	不明(貴州省)
1959年10月	全国工芸美術展覧	不明(北京市)
1960年2月26日-3月2日	雲南省少数民族服装飾物及青海藏族图案觀摩	中国美術家協会展覽館
1960年4月18日-4月24日	貴州民族民間工芸美術展覧	中国美術家協会展覽館
1963年12月	貴州省民間工芸美術展覧	不明(貴州省)
1964年5月	貴州民間工芸美術展覧	不明(雲南省昆明市)
1974年	貴州省美術作品展覧会、貴州省工芸美術展覧会	不明(貴州省)
1977年10月20日-11月20日	雲・貴・川・藏少数民族画展	中国美術館
1979年	貴州省美術作品展覧(貴州省民族民間蠟染織繡陶器展覧ほか)	不明(貴州省)
1980年10月1日-11月23日	全区少数民族生活美術作品展覧	不明(広西チワン族自治区南寧市)
1981年5月	全国少数民族服飾展覧	民族文化宮
1981年11月21日-	雲南省少数民族美術作品展覧	雲南省博物館
1981年12月12日-1982年1月31日	第2届広西少数民族生活美術作品展覧	不明(広西チワン族自治区南寧市)
1982年4月27日-5月11日	貴州民間美術展覧	中国美術館
1982年6月	貴州苗族服飾展覧	不明(貴州省貴陽市)
1982年6月25日-7月20日	広西壮族自治区少数民族生活美術作品展覧	北京民族文化宮
1982年7月6日-7月25日	貴州学習民間工芸美術新作展覧	中国美術館
1983年5月6日-5月22日	雲南民族生活美術・撮影展覧	北京民族文化宮
1983年	貴州民間美術展覧	雲南省博物館
1983年4月	湖南省湘西土家族苗族自治州民間美術展覧	湖南省湘西土家族苗族自治州文化館
1983年6月	貴州省少数民族服飾图案展覧	不明(北京市)
1984年4月	全国苗族服飾展覧	民族文化宮展覽館
1984年4月	白族民間图案展覧	不明(北京市)
1984年5月1日-	大理州民間图案展覧	北京民族文化宮
1984年5月27日-	紅河州民族服飾・風情・图案展覧	北京民族文化宮
1984年8月13日-8月26日	四川民間美術展覧	中国美術館
1987年5月25日-6月3日	貴州少兒民族民間工芸美術作品展覧	中国美術館
1987年9月	雲南民族民間美術展覧	不明(北京市)
1988年2月17日-2月27日	蠟染新作展	雲南美術館
1988年2月12日-2月26日	苗龍民間美術展覧	中国美術館
1988年4月4日-4月30日	貴州苗族風情展覧	中国歴史博物館
1988年4月15日-6月15日	貴州省民族民間美術展覧	不明(貴州省)
1988年5月26日-6月5日	馬正榮蠟染芸術展、廖志恵木瓢芸術展	中国美術館
1988年9月26日-10月6日	雲南民族芸術節美術作品展覧	雲南美術館
1988年	雲南民間芸術展覧	雲南省博物館
1988年11月11日-11月27日	貴州民族民間美術展覧	中国美術館

(出典)『中国美術年鑑(1949-1989)』[中国美術館(編)1993]と収集したパンフレットをもとに筆者作成(灰色部分は北京市で開催された展覧会)

めの図案を模写していた」と述べている。1973年から1980年までは、「服飾資料」をキーワードに、社会主義的風潮を反映した民族衣装の文献が編纂ないし出

版された。図案から民族画へとミャオ族の民族衣装に関する出版物が変化したのである。

他方で、新中国成立後から1980年代までの少数民

族の民族衣装に関わる中国国内の展覧会を見てみると、1958年以降増加していることがわかる。中国の西南地区に居住する少数民族の民族衣装に関わる展覧会をまとめたのが表3である。

まず、表3からわかるのは、新中国成立から1957年までに開催された当該テーマの展覧会は2回のみで、非常に少ないということである。1956年1月には「西南地区少数民族图案展」が開催されており、前章で示した出版物と同様、图案への関心が見て取れる。1958年以降に開催された图案や纹様を主題とした展覧会として、1958年4月の「贵州省民族民间服饰花纹展览会」や1983年6月「贵州省少数民族服饰图案展」(図3)等がある。

1958年以降に増加した展覧会は、その展覧会名に图案を明記したものは少なく、むしろ「民間工芸美術」や「民族民间美術」を主題とするものが多い。これらの展覧会名は、いずれも「民間」という言葉が使用されており¹²、それに「工芸」か「美術」、もしくはその両方が記されている。また、「民族」という言葉が付記されることもある。具体的には、1958年5月「贵州省民族民间工艺术品展览会」、1960年4月「贵州民族

民間工芸美術展覧」、1963年12月「贵州省民間工芸美術展覧」、1964年5月「贵州民間工芸美術展覧」、1982年4-5月と1983年の「贵州民間美術展覧」、1987年5-6月「贵州少兒民族民間工芸美術作品展覧」、1988年4月「贵州省民族民间美術展覧」、1988年11月の「贵州民族民间美術展覧」等である(表3)。このうち1963年12月の「贵州省民間工芸美術展覧」のパンフレット(図4)には、「展示品のほとんどが民族衣装の图案」と記されている。また、1982年4-5月の「贵州民間美術展覧」のパンフレットを見る限り、民族衣装に関連した展示品は图案であることが伺える。つまり、展覧会の名前は「民間工芸美術」や「民族民间美術」としているが、展示の内容は、出版物と同様、衣装の图案であった可能性が高い。

このほか、1958年以後には美術作品展も増加し、そこで民族衣装に関連した展示が行われていた。1958年2月になると、「贵州省首届美術作品展覧会」が贵州省文化局等の共催によって開かれている¹³。1974年には「贵州省美術作品展覧会・贵州省工芸美術展覧会」、1979年には「贵州省美術作品展覧(贵州省民族民间蠟染織繡陶器展覧・贵州省舞台美術展覧)」とい

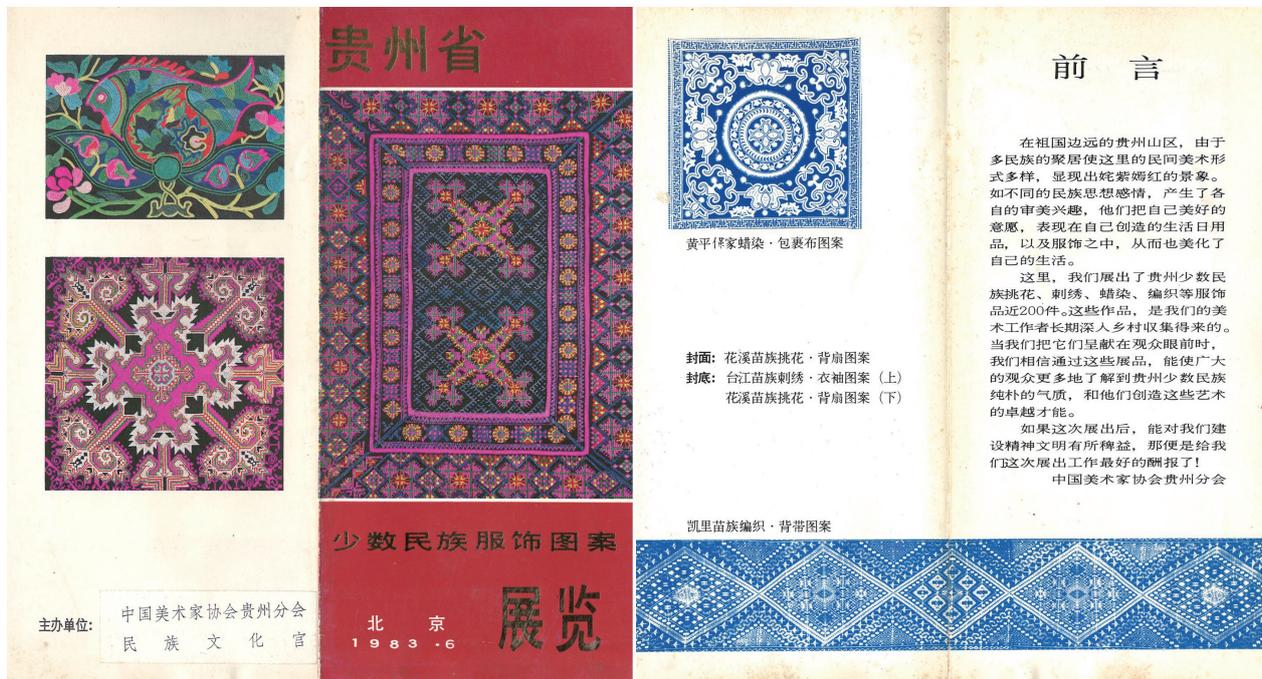


図3 「贵州省少数民族服饰图案展」(1983年6月)のパンフレット

12 ただし、1959年10月の「全国工芸美術展覧」や1974年の「贵州省工芸美術展覧会」では「工芸美術」としてミャオ族の民族衣装が紹介されている(表3)。
13 贵州省文化局・贵州省教育厅・贵州省民族事務委員会・中国共産主義青年团贵州省委员会・贵州省工会联合会・贵州省文学艺术界联合会的共催で開催した(中国美術家協會贵州分会籌委会(編)不明:68)。



図4 「贵州省民间工艺美术展览」(1963年12月)のパフレット

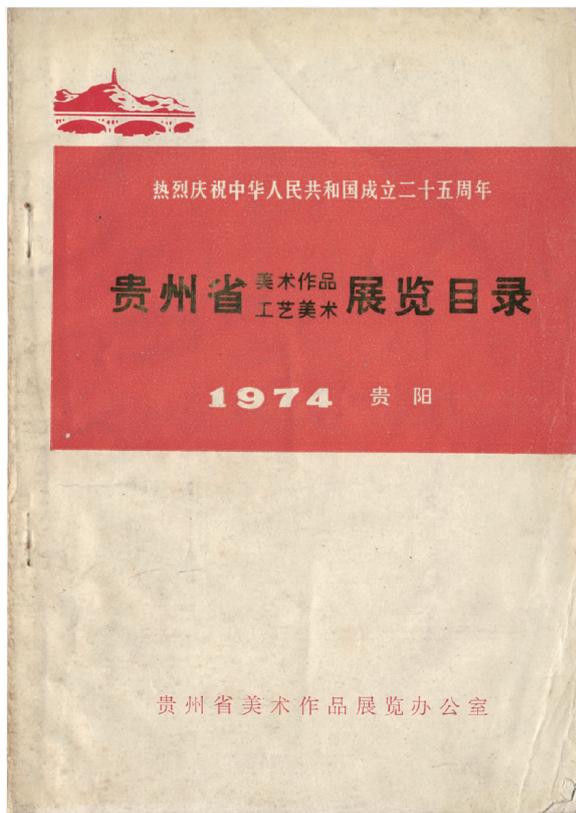


図5 「贵州省美術作品展览会・贵州省工艺美术展览会」(1974年)の目録の表紙



図6 「贵州省美術作品展览(贵州省民族民间蜡染織繡陶器展览・贵州省舞台美術展览)」(1979年)の目録の表紙

うように、美術作品展のなかで、「工艺美术」や「民族民間蠟染織繡陶器」の展示が行われている¹⁴(表3)。1974年の「贵州省工艺美术展览会」の目録(図5)を見ると、展示品は「專業とアマチュアの工艺美术工作者による民族伝統と地方の特色を帯びた工艺美术作品」とある。つまり、民族衣装そのものではなく、衣

装を含む民族文化を反映した創作物が展示されていた。こういった創作物の展示は、1982年の「貴州学習民間工艺美术新作展览」(図7)でも行われている。

1979年の贵州省美術作品展览内の「贵州省民族民間蠟染織繡陶器展览」では、2種類の展示物があったと記されている(図6)。一つは1974年と同様、貴州

¹⁴ 類似の展览会として、1958年10月には「贵州省工农兵美術作品展览会」、1959年8月には「黔东南自治州第一届美展」、1959年9月には「全省第二届美展」が開催された(中国美術家協會貴州分会籌委會(編)不明: 70-72)。



図7 「貴州学習民間工芸美術新作展覧」(1982年)のパフレット

省の工芸美術工作者が創作した蠟染め・陶器である。もう一つは、ミャオ族やプイ族の女性の服飾に施された刺繍の紋様と記されている。目録には、民族衣装やその一部が切り取られた刺繍パーツ等が展示されたようであるが¹⁵、紹介文には「紋様」の展示として紹介されている。このように、1958年以後の展覧会でも、図案や紋様は注目されていたのである。つまり、美術作品展での民族文化に関わる展示では、美術家による創作物と図案が主な展示品となっていた。

以上をまとめると、新中国成立から1957年までは少数民族文化に関わる展覧会はほとんど開催されていないが、図案を主題とした展覧会が開催されていた。図案をタイトルに含む展覧会は1980年代まで細々と続いている。1958年からは「民間工芸美術」や「民族民間美術」と題した展覧会が増えるが、そこでも衣装図案の展示が行われていた。同時期には、美術作品展も増え、そのなかでは図案・紋様に加え、民族衣装をはじめとした民族文化を反映した創作物が展示されていたのである。ここから、当時の民族文化に関連する展覧会の中心は、民族衣装の図案ないしそこから生まれた創作物であったことがわかる。

新中国成立以降、民族衣装の図案に関する展示は、1965年から1973年までの9年間を除けば、展覧会名は変わりながらも、断続的に行われてきた。その展示物は図案の模写や、民族衣装の一部であったが、当時の説明には衣装の展示ではなく、図案の展示として紹介されていたことは注目に値する。これらの展覧会のなかには、第II章で述べた貴州省文化局美術工作室に端を発する図案の収集・整理による図案集から発展したものもある¹⁶。つまり、新中国成立から1957年までに行われた図案の収集と整理は、1956年以後の図案集の出版と1958年以後の図案に関する展示の基盤となっていたと考えられるのである。

1965年から1973年までの、展覧会の空白期を経て、1977年には「雲、貴、川、蔵少数民族画展」が開催されている。これは、前章の「服飾資料」に関わる文献が関連していることが推測できるが、詳細は定かではない。1980年代になると、展覧会の内容は、2つの点で大きく変化するようになる。一つは民族名が展覧会名に示されるようになったことである。1982年6月には貴陽市で「貴州苗族服飾展覧」、1984年4月には北京市で「全国苗族服飾展覧」(図8)が開催され、

15 1983年6月「貴州省少数民族服飾図案展」(図3)でも、図案の模写ではなく実物が展示されている。

16 1958年4月の「貴州省民族民間服飾花紋展覧会(図案)」は貴州省群衆芸術館の主催であるが、当該機関が整理した図案・紋様400点を展示したと記されている(中国美術家協会貴州分会籌委會(編)不明:69)。また、表1に示した図案集の出版の後に、展覧会が開催されていたという記述もある(中国芸術館籌備処・北京華人経済技術研究所1997:686;中国美術家協会貴州分会籌委會(編)不明:85)。図案に関する展覧会は、中国国外でも開催された(中国芸術館籌備処・北京華人経済技術研究所1997:686)。



図8 「全国苗族服飾展覽」(1984年4月)のパンフレット



図9 「苗龍民間美術展覽」(1988年2月)のパンフレット

展覧会名には「苗族」という民族名がある。このほか、1988年2月の「苗龍民間美術展覽」(図9)、1988年4月の「貴州苗族風情展覽」が開催された。もう一つは、図案や創作物ではなく、民族衣装そのものを「民族服飾」として展示するようになったことである¹⁷。

写真の普及とも関連して、パンフレットには民族衣装そのものの写真や、衣装を着用した女性の写真を掲載するようになった(図3・8)。1980年代以後も、図案や創作物の展覧会は開催されているが(図7・9)、それと同時に民族衣装そのものも展示されるようにな

¹⁷ その契機は、1981年の日本での展覧会「中国55少数民族服飾展」であるが、この点については別稿にて論じている(佐藤 2020a, 2020b, 2021)。

り、民族衣装に関連する展覧会の展示品は多様化していったのである¹⁸。

IV 図案から生み出された創作物

第II章と第III章で示したように、新中国成立後から1980年までミャオ族の民族衣装に関する文献や展覧会は、図案に着目したものが主流をなしていた。ただし、1958年以後に増加した美術作品展においては、図案に加え、民族文化を反映した創作物も展示されていたことは、前章で指摘したとおりである。本章では、この創作物について詳細に述べていく。

1974年に貴州省美術作品展覧弁公室の主催によって、貴陽市で開催された「貴州省美術作品・工芸美術展覧会」では、図案の展示はほとんどなく、民族文化を反映した創作物が展示品の大半を占めていた。ここでは、労働者・農民・兵士といったアマチュアの美術工作者と専業の美術工作者による美術作品268点¹⁹、工芸美術作品431点を展示した(図5)。序文として、パンフレットには以下のように記されている。

毛主席の革命文芸路線と「百花齊放、推陳出新」の方針と指導の下、我省の専業とアマチュアの工芸美術工作者が、無産階級文化大革命と、林彪と孔子思想を批判する運動を経て、三大革命の燃え盛る闘争の中、民族伝統と地方特色のある多くの工芸美術作品をデザイン・制作した。これは、偉大な中華人民共和国成立25周年を祝うためである。

これらの作品は、我が国の社会主義革命と建設の偉大な成就、文化大革命の偉大な勝利と我が国の人民の新しい精神状態をある程度反映している。

貴州工芸美術は偉大な祖国民族文化芸術の宝庫であり、それらは民族風格と地方色彩を色濃く有している。今回の工芸美術展は、省群衆芸術館と市工芸

美術研究所²⁰の共催であり、我が省では初めての開催である。展示品の数は、染織・陶磁器・彫刻・堆画・剪紙等52種類434点である。目的は、党に向けて報告することであり、多くの労働者・農民・兵士・大衆の意見を聞き、我が省の工芸美術事業を促進し、毛主席の文芸路線の勝利にそってより良く前進することである。

1950年代には民族衣装の図案の収集・整理を担っていた貴州省群衆芸術館が主催機関の一つとなって、「貴州省美術作品・工芸美術展覧会」を開催していた。また、当時、各民族の民間芸術は革命性を帯びたものへと変化していったことが確認できる。

展示品の目録を見てみると、宝石象嵌像、蠟染めの作品(タペストリー、カーテン、スカート、手提げバック、テーブルクロス、座布団、傘、枕、ハンカチ等)、ミャオ族や漢族の刺繍、陶磁器、漆器、絵画、木彫、剪紙等、工芸作品や日用品が展示されていた。作家の所属機関は、貴陽工芸美術研究所が多くを占め、省群衆芸術館、省軽工局、省芸術学校等も散見される。前章で取り上げた馬正栄氏も省創作室の所属として、蠟染めの壁掛け・手提げバック・テーブルクロス・座布団を出品している。1950年代の図案の収集・整理は、その後、民族伝統を反映した工芸美術作品を生み出すことへと移行していた。こういった創作活動は、1955年頃から行われていたようである。『貴州美術工作十年概況』(中国美術家協会貴州分会籌委會(編)不明)には以下のように記載されている。

1955年11月には、貴州省美術工作室がミャオ族の挑花(クロスステッチ)図案の収集と整理を行い、重点的に試作活動を行った…。…試作品3点をデザインし、北京に送り、国外にて展示した。(中国美術家協会貴州分会籌委會(編)不明:86)

18 このほか、1980年代以後は海外での展覧会も増加していく。具体的には、1983年9月20日-10月7日「中国少数民族服飾工芸品展」(パリ)、1983年10月-11月「中国少数民族服飾工芸品展」(ブカレスト)、1984年「中国少数民族服飾工芸品展」(マスカット)、1984年「中国民族服飾工芸品展」(サンフランシスコ)、1985年「中国少数民族服飾展」(ベルギー)、1988年2月「少数民族服飾展」(キャンベラ)が開催されている(中国美術館(編)1993:1206-1207,1212,1217)。これらの展覧会もまた、1981年の日本での展覧会「中国55少数民族服飾展」が契機となっている可能性が高い。

19 美術作品展では、中国画・油絵・版画・連環画が展示された。そこには、農民画の創作経験を経て、多くの美術作品を生み出したと記されている。美術作品のなかには、のちに『貴州少数民族服飾資料(苗族部分)』(蔣(絵)1980)を出版した蔣志伊氏の版画「苗寨女籠」もあった。また、1979年の「貴州省美術作品展覧」でも蔣氏の絵画が展示されている。

20 貴州省貴陽市にあり、軽工業局の指導者によって工芸美術研究設計を担う機関である。1964年4月に設立された貴陽市工芸美術研究設計室が前身で、1972年に現在の名称となった。貴陽市の軽・手工業産品の装飾や工業デザイン、広告デザイン、日用の染織品・民間工芸・観光土産の開発が主要な任務である(中国美術館(編)1993:152)。

1956年5月には、…中国美術家協会貴陽分会籌備会が設立された。…その下部組織として、国画・絵画・版画・漫画・工芸・彫刻・理論の7つの専門小組を設立し、関連する100以上の美術作者をこれらに配置し、イベントを頻繁に行い、創作に関する問題を討論した。(中国美術家協会貴州分会籌委會(編) 不明: 11, 20)

収集・整理・出版・紹介等の業務を通して、貴州少数民族の豊富で多彩な芸術に関する、最初の、そして比較的系統的な研究仕事が始まった。…群衆がこれらの民族美術に接するなかで、…専業の工芸美術工作者のなかには重外軽中の芸術思想を初めて改める者もあり、彼らは民族芸術の特徴に基づき、いくつもの服飾・カーテン・テーブルクロス・ハンカチ等の新製品を試作り、各方面に提供するとともに、研究を行なった。(中国美術家協会貴州分会籌委會(編) 不明: 3, 7, 9, 23, 84)

1958年9月には貴州民族学院工芸美術工場が設置され、多くの試作品を作った。そこでは、挑花(クロスステッチ)を生かしたテーブルクロス、手提げカバン、クッション、手ぬぐい等約50種、挑花(クロスステッチ)のミャオ族の衣装一式、蠟染めや刺繍を生かしたクッション、カーテン、テーブルクロス、手ぬぐい、スカーフ等約30種の試作品が生産された。(中国美術家協会貴州分会籌委會(編) 不明: 87)

ここからも、当時の美術工作者は収集した図案をもとに創作活動を行っていたことがわかる。そういった作品の展示は1955年頃からすでに行われていたのである。

文化大革命の終了後も、民族文化を反映した創作物の展示は続いていく。1979年には中国美術家協会貴州分会・省群衆芸術館・市工芸美術研究所の共催で「貴州省美術作品展覧」が開かれ、そのなかで「貴州省民族民間蠟染、織繡、陶器展覧」が開催された。この展覧会は、文化大革命後初めての展覧会であった(馬1983)。そのパンフレットの序文は以下のとおりである。

中華人民共和国成立30周年を祝うため、我々は

共同で「貴州省民族民間蠟染、織繡、陶器展覧」を開催した。展示品は2つに分かれる。前半部分は、ミャオ・パイ等の民族女性の服飾花紋(紋様・図案)である。具体的には、蠟染め・刺繍・挑花(クロスステッチ)・編織・陶器166点である。後半部分は、我が省の工芸美術工作者が創作した蠟染め・陶器である。展示品は約420点ある。

今回の展覧会が、伝統を学んで新産品を創作し、文化生活を活発にさせ、文化交流を強化することに貢献することを望む。同時に、批評やアドバイスを歓迎し、これをもって我々の活動を改善していく。

1974年の「貴州省美術作品・工芸美術展覧会」から一転、パンフレットの序文に革命色はほとんどない。また、展示品も1974年にはなかった服飾の紋様・図案が加わっている。展示品の目録をみると、中国美術家協会貴州分会・省群衆芸術館・市工芸美術研究所が収集したとされる、ミャオ族やパイ族の蠟染めの手拭いやおおい紐、民族衣装から刺繍部分や織り部分を切り取ったもの、そして図案の模写と思われるものが半分を占める。残りの半分は、1974年と同様、民族の紋様や製作技術を日用品・工芸品に応用した作品であった。ここでも馬正栄氏は10点の蠟染めを出品している。

貴州省における美術工芸工作者による創作物は、1982年7月6日から25日までに中国美術館で開催された「貴州学習民間工芸美術新作展覧」(中国美術館と中国美術家協会貴州分会の共催)で花開くことになる(表3・図7)。馬正栄氏ら23名の作家が参加した展覧会であったが、中央テレビの取材を受けたり、多くの美術界の専門家が参加した²¹(馬1983)。当時、中国美術家協会の副主席だった華君武氏は座談会で以下のように述べたという。

私は少し決まりが悪い。宣伝すべきものを宣伝しないというように、物事が逆さまになっている人がいる。…私はかつて貴州美術家協会をやや見下していた。だが、口に出すことはできなかった。あなたの方のあたりは比較的立ち遅れていて、物を作っても見た目が悪く、入選作品も少ない。今日のこの展覧会は良い。率直に言えば、開催する価値はあった

²¹ 日本の株式会社三越の職員が展覧会に足を運んだことも記されている(馬1983)。

と思う。国外への展示にも推薦できる。(馬 1983: 5)

同様に、中国美術家協会の副主席だった王朝聞氏は、雑誌『新観察』(16期)にて「看貴州美展」というタイトルでこの展覧会を賞賛している(王 1982: 16)。このほか、画家の袁運甫氏も以下のように称賛している。

貴州の同志は極めて劣悪な条件のもとこれらの作品を創作した。これは素晴らしいことだ。貴州美術家協会は先見があり、長い間民間芸術の発掘と整理、出版等の仕事を重視してきた。1950年代には『貴州苗族刺繡』、『貴州蠟染』等の書籍を出版し、今回も創作において成果を出した。この2年のうちには、人民美術出版社と4冊の本を編纂し、去年は日本で「貴州苗族刺繡、蠟染展覧」を開催した。今年は北京で「貴州学習民間工芸美術新作展覧」を開催した。大きな成果を挙げたと言える。(馬 1983: 6)

これらの賛辞からもわかるように、1953年から1957年までの民族衣装図案の収集と整理、1965年に至るまでの図案集の編纂と出版、1958年から盛んに行われる図案と創作物の展示、そして1982年の創作物の展覧会における貴州省への賞賛は、1966年から1971年までの空白期があるものの、関連性のある一連の流れとして捉えることができるのである。

以上、本章では1958年以後に増えた美術作品展における民族文化を反映した創作物の展示についてまとめた。第II章で述べた美術工作者による図案の収集と整理は、1955年頃から新しい工芸作品や日用品の創作にも展開していった。1958年以後はこういった創作物の展示は社会主義的な風潮のなかで徐々に増え、革命色が薄れた1979年以後も続いた。そして、これらの創作物は、1982年の「貴州学習民間工芸美術新作展覧」で全国的な注目を集めるようになったのである。

V 結論

本稿では、新中国成立以後、1958年を境にミャオ族の民族衣装に関わる中国国内の文献と展覧会の内容がいかに変化したのかを検討した。シェインが指摘したように、民族文化への理解と蔑視が混在した時代から、社会主義的風潮が強まり民族的特徴が軽視された

時代への移り変わりは、時期は多少ずれているものの、ミャオ族の民族衣装においても見て取れた。1949年から1957年までに見られる民族文化への理解と蔑視は、ミャオ族の民族衣装においては、衣装図案の収集と整理、そして図案集の出版というかたちで実践されていた。図案に焦点を当てるということは、衣装全体を示すことを避けるということでもあった。ただし、図案に関する出版物は1966年から1979年まで、展覧会は1965年から1978年までは一時的に停止しているが、中国では一つの潮流として、民族衣装が消費可能なものになってからも続いている。

1958年以後、社会主義的風潮が強まると、出版物としては図案集が徐々に下火となり、少数民族を描いた線画集が出版されるようになった。他方で、この時期は、美術作品展や「民間工芸美術」「民族民間美術」をテーマとした展覧会が増加し、そこでは図案・紋様や民族文化を反映した創作物(工芸品や日用品)が展示されるようになった。また、これらの展示品は、1957年までの図案の収集と整理を基盤として生み出されたことがわかった。より厳密には、図案に関する展覧会が停止していた1965年から1978年までの間には、民族文化を反映した創作物が主に展示されていた。つまり、社会主義的風潮が強まるなかで、創作活動は革命性を帯びた振る舞いとして推奨されていたと考えられる。そのなかで、線画集や新しい工芸品・日用品が生まれていったのである。創作物の展示は1979年以後も続き、これによって貴州省の作品群は1982年に全国的に注目され、高く評価された。

以上を踏まえると、1981年以後は民族衣装そのものを撮影・編纂、ないし展示することが中国でも通例となるが(佐藤 2020a, 2020b, 2021)、それ以前は必ずしもそうではなかったことがわかる。衣装全体を示した文献は「服飾資料」と題した1973年から1980年までの数冊の線画集に限定されおり、民族衣装そのものの展示はあくまでも図案の展示として行われていた。つまり、中国国内における民族衣装に関する書籍や展覧会では、新中国成立以後、図案から創作物へと重点が変化し、双方が継続するなかで、民族衣装全体も掲載・展示されるようになっていったのである。

謝辞

本稿の議論は、宮脇千絵氏を代表とする南山大学人類学研究所共同研究「装いの境界領域に関する人類学的研究」の研究会において、共同研究のメンバーからいただいたコ

メントによるところが大きい。また、本研究のもとになった調査は、公益財団法人村田学術振興財団研究助成と日本学術振興会科学研究費（19K20555）により可能となった。心よりお礼を申し上げる次第である。

参照文献

(日本語文献)

佐藤 若菜

2020a 「1978年以降の日中間交流に関する人類学的考察——ミャオ族の民族衣装に着目して」『ANNUAL REPORT OF THE MURATA SCIENCE FOUNDATION』34: 628-634。

2020b 『衣装と生きる女性たち——ミャオ族の物質文化と母娘関係』京都大学学術出版会。

2021 「古着から展示可能な民族衣装へ——中国少数民族の装いにおけるグローバルな広がりと価値の変遷」『CIRAS Discussion Paper 装いと規範4——「価値」が生まれるとき』102: 6-13。

2024 「民族衣装への部分的関心にもとづく収集——中国貴州省のミャオ族の事例から（特集 ミュージアムと「民族衣装」）」『arts/』40: 46-55。

周 星

2015 「農民画という「アート」の創生——プロパガンダから観光商品へ」『国立民族学博物館論集3 中国社会における文化変容の諸相——グローバル化の視点から』韓敏（編）、pp. 245-282、風響社。

馬 正栄（編）

1981 『貴州苗族蠟染図案』中国外文出版社・美乃美。

毛里 和子

1998 『周縁からの中国——民族問題と国家』東京大学出版会。

雷 圭元

1981 「貴州蠟染めの魅力」『貴州苗族蠟染図案』馬 正栄（編）、p. 3、中国外文出版社・美乃美。

(英語文献)

Diamond, Norma

1988 The Miao and Poison: Interactions on China's Southwest Frontier, *Ethnology* 27(1): 1-25.

1995 Defining the Miao: Ming, Qing and Contemporary Views. In *Cultural Encounters on China's Ethnic Frontiers*, Stevan Harrell (ed.), Seattle: University of Washington Press.

Schein, Louisa

2000 *Minority Rules: The Miao and the Feminine in China's Cultural Politics*. Durham: Duke University Press.

(中国語文献)

貴州省編輯組（編）

1986 『苗族社会歴史調査（一）』貴陽：貴州民族出版社。

貴州省第二軽工業局工芸美術研究室・貴陽市工芸美術研究所（編）

1976 『兄弟民族形象服飾資料（苗族・布依族・侗族・回族）』内部資料。

貴州省群衆芸術館（編）

1956 『貴州少数民族図案選集』貴陽：貴州人民出版社。

1959 『貴州苗族民間剪纸』貴陽：貴州人民出版社。

1960 『工芸美術叢書 丹寨苗族蠟染』上海：上海人民美術出版社。

1965 『貴州少数民族服飾図案選』上海：上海人民美術出版社。

貴州省文化局美術工作室研究組（編）

1956 『貴州少数民族蠟染図案』北京：人民美術出版社。

湖南省民族事務委員会（編）

1957 『湖南少数民族図案集』長沙：湖南人民出版社。

黄 守堡・劉 宗河（編）

1986 『貴州少数民族服飾図案芸術』北京：貴州人民出版社・外文出版社。

蒋 志伊（絵）

1980 『貴州少数民族服飾資料（苗族部分）』貴陽：貴州人民出版社。

李 小非・周 愛国（編）

1989 『中国民間美術叢書1 苗族裝飾芸術』重慶：重慶出版社。

劉 顕・包 慶釗・呂 国昌（絵）

1981 『蠟花朵朵（図案集）』貴陽：貴州人民出版社。

麻 明進（編・絵）

1987 『苗族裝飾芸術』長沙：湖南美術出版社。

馬 正栄（編）

1980 『貴州苗族蠟染図案』北京：人民美術出版社。

馬 正栄

1983 「貴州学習民間工芸美術新作展在北京展出」『貴陽工芸美術』1: 5-7。

1987 「美協貴州分会対民間工芸美術の搜集、整理概況」『中国民間美術研究』中国芸術研究院美術研究所（編）、pp. 612-621、貴陽：中国美術出版社。

美術資料組（編）

1978 『苗族、布依族服飾資料』香港：百泉出版社。

上海工芸美術研究室（編・絵）

1973 『少数民族服飾資料』内部資料。

譚 遥（編）

1957 『西南少数民族織繡図案』北京：朝花美術出版社。

王 朝聞

1982 「看貴州美展」『新觀察』16: 16。

汪 祿（収集整理）

1982 『蠟染』成都：四川人民出版社。

1983 『苗族侗族服飾図案』成都：四川人民出版社。

楊 成寅・林 文霞（編）

1992 『雷圭元論図案芸術』浙江美術学院出版社。

中国美術館（編）

1993 『中国美術年鑑1949-1989』南寧：廣西美術出版

社。

中国美術家協會貴州分会籌委會（編）

不明 『貴州美術工作十年概況』内部資料。

中国芸術館籌備處・北京華人經濟技術研究所（編）

1997 『中国群眾芸術館誌』北京：社会科学文献出版社。

中央民族學院民族文芸工作團・貴州省文化局美術工作室研究組（編）

1956 『苗族刺繡圖案』北京：人民美術出版社。

From a Design to a Works of Art:

Changes in Books and Exhibitions on Miao's Ethnic Costumes in China from 1949 to 1980

Wakana SATO*

The purpose of this study is to determine how the material culture of ethnic minorities was treated in China from the establishment of New China to 1980, focusing on books and exhibitions on Miao's ethnic costumes. From 1949 to 1957, ethnic costumes of ethnic minorities were required to be better understood in the new ethnic policy. After 1958, ethnic characteristics became less important in the face of the growing socialist trend. By the 1980s, inappropriate images of ethnic costumes had disappeared, and they had become consumable. This paper examines how ethnic costumes of the Miao were represented in books and exhibitions in the context of these changes related to the ethnic culture, focusing on the period from 1949 to 1980.

In the conclusion, I indicate that the understanding and disdain for ethnic culture seen from 1949 to 1957 was practiced in the form of collecting and organizing costume designs and publishing collections of designs in the Miao's ethnic costumes. The focus on the designs also stemmed from an aversion to showing the costume as a whole. After 1958, as the socialist climate intensified, there was an increase in the number of art exhibitions and "folk craft art" and "ethnic folk art" themed exhibitions, in which designs, patterns, and works of art reflecting ethnic culture were displayed. These exhibits developed on the basis of the collection and organization of designs until 1957. Today, it is customary to exhibit or photograph entire ethnic costumes and compile them into books. However, since the establishment of New China, books and exhibitions on ethnic costumes in China show a shift in emphasis from designs to works of art.

Keywords

ethnic costumes, exhibitions, designs, Miao, China

* Kyoto Women's University